

養 蚕 の 村

佐 藤 光 代

オ一部 美九里村の養蚕の発展

—高山社を中心として—

夜中の産業とまでいわれている製米業の原料部門である養蚕業は現在その岐路にたっている。しかし愛知のごとく生糸は幕末開港以後昭和初期に至るまで輸出品の王座を占め、それに従って養蚕業もまた非常な繁栄ぶりを示した。

明治以後の養蚕業の繁栄と衰退のうつりかわりを一つの村の中で具体的にとらえようとしたのがこの報告である。

明治以後我国養蚕業は大きくは資本主義経済という枠の中でその流れに沿いながら小さくは旧々の地域に於て様々な特殊性を示しながら発展して来た。それぞれの地域はその自然的、社会的条件によって異った道あるいは同じような道を辿ったことであろう。

ここでは群馬県足野郡美九里村の養蚕業が明治以後～昭和初期に至るまでの間にいかなる道を歩んだかを調べ出来れば他地域との同異点を明らかにしたいと思っている。

わI章では美九里村の養蚕業発展の興衰をみる前にそれが群馬県の養蚕業の中でどんな位置を占めたかを知るために県の養蚕及び製米業の発展を簡単に眺めた。

Ⅰ (1) 明治～昭和初期における群馬県の養蚕業発展を郡別にみると4つの地域に区分出来る。

(1) 新田、山田、邑楽郡

養蚕農家率、桑園率ともに低く、水田率が高い。

(2) 群馬、勢多、佐波郡

養蚕農家率、桑園率ともに高く、水田率は(1)のグループに比べれば低いが高率としてはかなり高い。

(3) 足野、甘楽、碓氷郡

養蚕農家率、桑園率高く、水田率は低い。

(4) 利根、吾妻郡

養蚕農家率は高いが、桑園率も水田率も低い美九里村は(3)のグループに属している。

I - (2) 製糸業

明治 10 年代以後の上州の製糸業の発展には大きくみて二つの傾向つまり商業資本家による官業製糸と養蚕農民による組合製糸との二つが指摘しうる。

オII章で実態調査の部に入る。

ここでは日本における養蚕学校の嚆矢といわれる高山社を中心とした村の養蚕のうごきを資料にもとずいてまとめた。

II - (1) 明治初年

(1) 高山社の発生を詳しくみる。

(2) このころの養蚕は規模は小さかったが戸数の多寡程度（明治5年）が行っている。

II - (2) 明治 10 年代～末年

(1) 高山社の急激に発展していく様を地図、クラブなどにより眺める。

(2) 高山社と平行して村の養蚕も日本の全国的な興隆の波にのって発展する。

II - (3) 大正末期～昭和初期

(1) 独占資本化した大製糸家におされて高山社が没落していく様をとらえる。

(2) この期は全国的にも村に於ても養蚕は衰退への一歩をふみ出すときである。

村に於ては桑園、収繭量にはそんなに変化はみられないが製糸場、産繭処理、蚕種製産人の変化が見られる事から、養蚕農民が大製糸業者に従属していく様が分る。

以後の動きはオII部に於て扱われる。

戦後の開拓地 川辺開拓地の現状分析

—その発展過程を中心に—

常 田 秀 子

1. 目 的

戦後開拓地の一つ、長野県小諸市西方の御牧原上にある川辺開拓地の現状を主としてその発展過程を中心にして分析し、その地域性を評価しようとするものである。